
アスファルト

石鍋 盆回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アスファルト

【Zコード】

N4684C

【作者名】

石鍋 盤回し

【あらすじ】

私は仕事で疲れていた。何の変哲も無い夜。うんざりする、夜道。明日も仕事だ。私は更にアクセルを踏み、車を飛ばした。

アクセルを踏み込む。

ポルテは長距離を乗るには楽だけど、つまらない車だ。

兄が早々に飽きて私に譲るのもわかる。室内空間が売りのこの車は、ペーパードライバーの私ですから、恐怖よりも退屈を覚える。

私はいつものように、延々と無駄なことを考えながら家路を飛ばしていた。

エメラルドグリーンの液晶。見やるまでも無く、ついに田舎を跨いでいる。

土曜日。数時間後にはまた仕事だ。

うなぞりとため息をついた。

シャワーだけ浴びて、ベッドに倒れこみたい。

田舎の夜道。薄く靄がかかっている。くねつてはいるが殆ど走行はない。慣れた道だ。

踏む。

更に、踏む。

法定速度の一倍は出ている。

薄情なエンジンはさておいて、タコメーターだけがやたらと元気だった。

燈に輝くラインの上に、じぶが見えた。
咄嗟にブレーキを踏んだ。

「ふは、驚き刹那身構えて、私のポルテのほうへと駆け出した。

黒猫だった。

ブレーキに、振動が走った。

後輪に、何かが一瞬からまつたような気がした。

体が固まる。

やってしまった。ただそれだけで、頭が一杯になつた。

肘から先だけが別の生き物みたいに車を運転していた。

今の振動が単にキックバッくなのか、猫だったのか、なんて今更ながら言い訳を探した。

ポルテは車高がやや高い、とか。

ホントにやつてしまつたにしては衝撃が無かつた、とか。

ホントに猫だったの?とか。

でも全部ホントで、あの速度だったら人間だつて……。

教習者みたいに法定速度ぴつたりで運転していた。

すぐにはアパートにたどり着いた。

玄関まで、振り返らなかつた。

冷水のシャワーを浴びた。体が震えだすほどずつと浴び続けた。体の震えに、あの時の振動が紛れるようになつた。

ベッドに倒れこむ。

タオルケットに包まって、震えていた。

外で、じいじいと虫が鳴いている。

皮膚ばかりが熱かった。がらんどうの頭の隅で、枯死してしまったうだ、なんて思った。

膝を抱く。奥歯がかちりかちり鳴る。

一体どれくらいそうしていたのか、虫の声が聞こえなくなつた。静かに、雨音が響いてきた。

そしてやつと、私は眠りに落ちていつた。

台風が近付いていたらしい。

朝には横殴りの突風と痛いほど大粒の雨に変わつた。

昨夜の道は川に近い。

そういう理由で、別の道を通つて会社へ向かつた。

こわごわと見つめたポルテは、激しい雨で銀色だった。
泥のような銀色だった。

台風一過。

極上の晴天、日曜日だった。

私は恐る恐るポルテを出した。

一昨日の夜、黒猫を見た場所まで法定速度で走った。

車を止める。

降りて、歩く。

猫の死体は無かった。

アスファルトは何の変哲も無いねずみ色だった。

もはや、あの夜のすべてが陽炎。

せみが鳴いている。

私は少し、その場で泣いた。

(後書き)

後の祭り。という。

彼女の涙は、安堵か。

永遠に失われてしまつた眞実にか。

まだ勉強が足りないなー。難しいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4684c/>

アスファルト

2010年10月13日19時45分発行